雨宿りの箱庭　～二・一が無～

森下　温美
（関西医療学園）

Ⅰ．はじめに

本報告は，筆者が『雨宿りの箱庭』と名づけているDV（domestic violence）シェルターでの箱庭の第五報である。十牛図の第一図さながらに自力尽き心もとない自らをマクロコスモスに委ね，箱庭の宇宙に向き合いながら変容していく子どもたちの様子を第四報までに考察するなかで，筆者らもまた【じゃんけん】という優れて平和的な解決の法則が，実は易学の日本的限定という，文化的に極めて重要な無意識的意味を有するものであること等，多くのことに気づかされてきた。本報では，典型的な被害女性の箱庭を素材として日本人の自己実現モデルの特殊性に焦点を絞り，その原理を明らかにすることを目的としたい。

Ⅱ．事例の概要

クライエント（以下Clと表記）は被害者当人で生後二ヶ月の子どもと共に入所してきた30代女性である。二次被害防止が至上命令の現場で，Clの希望からの開始とはいえ，主訴は不明，個人情報は皆無の状態から箱庭が開始され，その時々の治療者（以下Thと表記）との信頼関係に応じて情報が提示されていった。

Ⅲ．事例の流れ

＃1　箱庭①

バギーを押して入室してきたのは，すらりと背が高く，明るく楚々とした現代的な印象の女性で，「箱庭をしてみたい」と告げ，保母をしていたことやこれまで受けたアドバイスについて語りながら制作した。箱庭では抑圧された迷いが，被害者に典型的な初回の構図で表現されていた。

＃2　箱庭②

地門（右下）にエネルギー備給のイメージが表現され，こういう場所に行きたいが，そんなことを言ってはいけないのではと遠慮がちに言った。自らの繊細なこころの一部分や過去の失敗は枠外に置かれ，子どもと一緒にそれを見守る構図があり，指示的な環境への戸惑いを語っていた。

＃3　箱庭③

少し元気になって来室。ここ二年のクリスマスはあまりよい思い出がなかったから，今年こそはよいクリスマスになるようにと祈りをこめてマンダラ調の表現がなされた。スタッフや入所者との人間関係のストレスやいまだに届く（昨年の）婚礼のお祝いなどの現実をどう処していくかなど課題は山積みながら，夫との関係修復への期待を明るく語っていた。地門では表象的に「見性」が始まったことを暗示していた。

＃4　箱庭④

等身大の自分に近い人物とスポーツカーを置くことが出来たと言う。箱庭全体に動きが生じ，シェルターの外へ出る発想が生れる。メルヘンチックにしか置けなかった＃1の自分を理解できるとも言語化した。うっそうとさせながらも鬼門（右上）への道が出現すると，同時に人門（左下）に母との葛藤の予感が表現された。夫の意外な反応への驚きを語る。

＃5　箱庭⑤

Clの入室直前にThが棄てたリースを所望し，マンダラ調のものを再び制作した。「子どもが今日で丁度生後三ヶ月なので手作りケーキでお祝いのイメージ」と言語化するが，＃1の構図も曼荼羅に押し上げられ，少し進化している。赤い実をばらして飾ったのが印象的だった。

＃6　箱庭⑥

離婚調停の準備に関して，夫の反応に対し『ことの重大さを理解できているのだろうか』と唖然とし驚いたと報告した。箱庭の空間はくっきり分離され，二頭の麒麟が中心にいた。

【翌週の約束の当日，スタッフから連絡があり，休みとなる。さらに一週間後，意気消沈して入室し着席したが，うつむいて無言。辛さを語り始めると涙が止まらなくなる。現実が予想と大きく食い違い，深層からバランスが崩れたらしいが，言語化できた本音をThは強く支持した】

＃7　箱庭⑦

以前の印象に戻り，回想をする。大きな池があり，逆行する人たちがおり，鬼門の木は夏仕様になった。子ども達に「大人もしていいの？」と聞かれ戸惑ったエピソードやストレスの高い入所者との距離のとり方について話す。

＃8　箱庭⑧

海底の表現が最後の箱庭となった。天門（左上）に太陽，鬼門には何か置きたかったがイメージが浮かばなかったと語ったが，すぐ近くまで蟹がきている。このあと退所を決意することができたばかりか，自ら交渉して外来相談という特約をとりつけた上で退所し，実母との葛藤をしながら，自我強化されて変容した目で暴力夫と現実に出会い直し，客観的に判断しつつ，離婚調停や再就職など現実の問題に果敢に対応し始めた。現在は自らの経験を少しづつ社会に還元することで他者救済をしながら生きている。

Ⅳ．考察

①今・ここの見性

DVシェルターでの対応は制限が多く，第三者から見れば特異なものに映るかもしれない。しかし，必要に迫られて工夫をするなかで得心したのは，気の遠くなるような集合的無意識の深い層をいつどこで生れたという履歴もなくただ遍歴しているだけの魂（Seele）に対して我々が聴収できるのは心もとない瑣末な情報にすぎないのに対して，気軽に訊ねることがいかに相手を傷つけるかという事実であった。【今ここ】に全身全霊で徹する禅のような自己実現の方法は，家族関係が複雑化の一途を免れない現実の未来を見据える観点からも，再考され既存の心理学に習合されてもよいものではないかとすら思うようになった。厳密な意味での修行者でなくとも日本人の意識はその文化・伝統・生活において禅に貫かれている。それは創造的な根源的行為として自覚に至る学びの道として現代日本人のこころに生きている世界に誇る文化でもある。

②　涙～日本流リセットの原理

日夜自己研鑽に努め，面接中は無心に行うのが臨床家の理想であろう。一方でその結果の是非を問う時には大拙（1954）の主張のように心理学は哲学や宗教に抜ける必要がある。ユングも魂の宗教性を哲学的に論じたが，文化差配慮への重要性を強調した。Clらの命がけの誠意を妄想や嘘に貶め，その宇宙を破壊する危険性を回避するためには，現在のところ拡充法しか方法がない。ユングと同時代に東西の思想に対し徹底した比較と思索を行った西田幾多郎（1946）は，生命はいつも絶対現在の自己限定からであり，その本質は再生にあると言った。古事記におけるスサノヲがミクロコスモスもマクロコスモスも泣き枯らしたことに象徴されるような涙がClに大いなる飛躍を遂げさせたとは言えないだろうか。【二・一が無】とも呼ぶべきリセットの方法は『十牛図』や『正法眼蔵』等にもみられる普遍的な魂の根本原理ではないだろうか。

③　空間象徴と易

歴史とともに習合を繰り返し更新することで我々の無意識は日々異熟している。古代中国の哲人の目に映った易学が千年以上に渡り日本文化に影響を与えてきたことは先行研究に明らかであるが，方角は日本人が易の原理を取り入れる際に最も重要視したものの1つである。作品を理解するにあたっても西洋の空間象徴を使用するよりも易の空間象徴と重ね合わせた方が自然に感じられるように思われる。

④　物語の終わり方

②の問題のなかには物語の終わり方が含まれるだろう。西洋哲学の弁証法に当てはめると，折角の「無分別智」の表現が「分別のなさ」に嵌め殺され貶められて解釈され，「治療の失敗」とみなされることすらあるだろう。本報告のClの作品もそういった類のものであると思われる。箱庭の二次元使用の深みについては既に指摘されているが，【海枯不到露底】（道元）かつ【返本還源】（十牛図）的に現実適応へ非連続の連続を果たしたとは考えられないだろうか。

Ⅴ．おわりに

日本文化は大陸から多大な影響を受けてきた。古事記は，キリスト教や西洋哲学が日本人の無意識に影響を与えるはるか以前に大陸から受けたカルチャーショックが魂の流儀に従って既述されたものである。祖先が易学を遮二無に取り入れ日本文化に習合しようとした跡は高松塚古墳やキトラ古墳にも明らかである。退色のはなはだしいモノとしての飛鳥美人は科学の力の限界の象徴であるが，コトとしての原理は平成生れの子どもたちの無意識にさえ残存している。「不可視に見えて不可得ではないという点を間違うな」とは道元の指摘である。